「文字の上手さ」はどのような観点で評価されるのか？ —エキスパートとノービスによる手書き文字評価の分析的検討— From what perspective is "good handwriting" evaluated? —An analytical study of handwritten character evaluations by an expert and a novice—

川原 名見[†], 高橋 麻衣子[‡], 犬塚 美輪[≠]
Nami Kawahara, Maiko Takahashi, Miwa Inuzuka

[†]東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科(博士課程), [‡]早稲田大学, [≠]東京学芸大学
Doctoral Course The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University, Waseda University, Tokyo Gakugei University
r241003g@st.u-gakugei.ac.jp

概要

本研究では、手書き文字の評価に関する観点を探索的に検討することを目的とし、中学生の手書き文字(n=174)に対する書写指導者(エキスパート)1名と指導経験のない一般成人(ノービス)1名の評価を分析した。エキスパートとノービスの総括的評価には中程度の相関があった。エキスパートによる8つの観点による分析的評価のうち、字形と配字の観点が総括的評価を有意に予測した。一方、エキスパートによる「今後伸びる」判断と総括的評価・観点別評価には関連が見られなかった。これらの結果をもとに、エキスパートとノービスの観点の異同について議論した。

キーワード: 書写指導, 分析的評価, 総括的評価, エキスパート, ノービス

1. 問題と目的

手書き文字に対する印象評価は、総括的に表現されることが多い。たとえば、「上手な字」「拙い字」などである。文字に関するエッセイ等でも、他者の字や自身の字へは「綺麗」「汚い」「美しい」「大人っぽい」「子供っぽい」「丁寧」「雑」など(e.g.新保, 2020), 総括的で曖昧な印象の評価の表現がされている。

しかし、書写指導の面において、総括的な評価のみでは、それを参考にして学習者の文字の印象を向上させることは難しいだろう。手書き文字への総括的な評価には様々な観点と到達基準が反映されているはずであり、それらを学習者に明示的に示すことが望まれる。

小中学校での書写指導では、整った文字を書く原理原則が指導されている。ただし、こうした原理原則については、以下の点が十分に検討されていない。第一に、それらの原理原則が、一般的な手書き文字に対する総括的な印象の評価の高さにどのようにつながるかは明確ではない。総括的な評価が高くなりやすい観点が見いだせるのであれば、複数ある観点のうちそれを優先的に指導し学習者に獲得させることもできるだろう。そこで本研究では、まず、書写指導のエキスパートに文

字の総括的評価と観点ごとの分析的評価を依頼し、両者の関連を検討することを第一の目的とする。

次に、書写指導経験のない大人(ノービス)が、指導者と同じ観点から文字の総括的評価を行っているのかは未検討である。指導場面だけでなく、日常的な場面でも、手書き文字が評価されることは多い。このときの評価者の多くがノービスだと位置づけられる。そこで本研究では、ノービスの評価とエキスパートの総括的・分析的評価の異同を検討し、日常的な場面での評価についての知見を得ることを第二の目的とする。

また、学校での書写指導では、基準文字(手本)と比べ足りないところを観点とするなど、従来型の自己批評の指導がされていることがあるが、このような指導は学習者の自己効力感の低下につながりやすい(松本, 2009; 折口, 2017)。学習者の達成を肯定的に捉え、よいところを活かした個性ある文字を書けるようにしていくこと、つまり、学習者全員に手本そっくりにかきせることではなく「その人らしさやその時々のかきぶり」も現代の書写指導の重要な目標である(全国大学書写書道教育学会, 2020)。書写指導は、児童・生徒にとって生涯必要とする文字に対する意識を高め、自分にも相手にも美しく読みやすい文字とは何かを考えさせ、自分の書きたい文字をイメージさせ、確実に表現できるような技能を獲得させるものでなくてはならない。

そのため本研究では、総括的評価とは別に、書写指導者がどのような肯定的評価をしようか、分析的評価の観点を通して探索的に検討する。本検討を通して、単に観点ごとの評価のフィードバックと自己批評にとどまらず、可能性を見出す指導のあり方を見出したい。

2. 方法

2.1 調査対象者

書写指導の有資格者1名(エキスパート:書写指導

歴32年)と、大学生1名(ノービス・21歳男性:子供の書道教室で書道経験あり)を対象とした。

2.2 材料

中学1年生90名、中学2年生84名の書字データを材料とした。材料は、中学生の書字能力の流暢性調査のために取得された視写データであった。生徒は、「できるだけ速く、でも、人が読んでわかるようにていねいな字で書いてください」との教示のもと、教科書体活字で印字された261文字の縦書きの文章を、1.8cm×1.8cmのマスキに、1分間で可能なだけ視写した。

2.3 手続き(エキスパート)

エキスパート1名に、生徒ごとに材料の文字の総括的評価を依頼した。評価の指標は「良く書けている」「まあまあ良く書けている」「普通」「あまり良く書けていない」「良く書けているとは言えない」とした。以上の5段階評価を文字の総括的評価得点とした。

その後、エキスパートと書写指導者である第一著者でディスカッションを行い、分析的に評価するために8つの観点を選定した(表1)。なお観点は新編 書写指導(2006)や光村凶書 構成と指導の系統一覧表(2025)等の書写指導用の書籍を参考にした。エキスパートに再度、材料を8つの観点にて、5段階で評価してもらい、観点別評価得点とした。また「今後伸びると思われる生徒」を理由とともに選出してもらった。

表1 文字の詳細評価の観点

観点	説明
字形	書写の字形の法則(間架結構法 ^{注1)} など)に基づき整えて書けているか
字粒の大小	マスキに対して、字粒(字の大きさ)が適切であるか
字粒の揃い	字粒(字の大きさ)が揃っているか。バラバラではないか
線質	線に抑揚(リズム)や伸びなどの表情の豊かさ、美しさがあるか
点画	点、折れ、ハネ、ハラ、そり曲げ、止め等が書き手の意図した箇所できちんと表現されているか
配字	マスキの中央に文字が入っているか。また、行の全体がまっすぐか
筆圧の強弱	筆圧が強いかわいいか
筆圧の適切さ	筆圧が適切か(筆圧の持続性・書く速さも加味し評価)

2.4 手続き(ノービス)

ノービス1名に、材料の文字に対し、エキスパートと同じ5段階で総括的に評価してもらい、文字の総括的評価得点とした。その後、文字の詳細評価の8つの観点に基づく再分類と、「今後伸びると思われる生徒」の選出をノービスに依頼したが、ノービスが「能力的に困難」という理由で辞退したため、調査を終了した。

3. 結果

3.1 総括的評価の相関と観点別評価の平均(SD)

エキスパートとノービスの文字の総括的評価得点の平均(SD)はそれぞれエキスパート2.57(0.81)、ノービス3.13(0.71)であった。両評価の得点間には、有意な中程度の正の相関がみられた($r=.50$, $p<.001$)。エキスパートの観点別評価得点の平均(SD)を表2に示す。

表2 エキスパート観点別評価得点 平均(SD)

観点	平均(SD)	観点	平均(SD)
字形	2.60(0.96)	点画	2.41(0.87)
字粒の大小	2.32(0.83)	配字	3.09(0.99)
字粒の揃い	4.01(1.05)	筆圧の強弱	3.04(0.84)
線質	2.49(0.89)	筆圧の適切さ	3.15(1.20)

3.2 エキスパートの評価の重回帰分析

エキスパートの総括的評価を、8つの観点別評価で説明できるか、従属変数を文字の総括的評価得点、独立変数を観点別評価得点として強制投入法による重回帰分析を行った。回帰式は有意であり($F(8,173)=16.98$, $p<.001$)、モデルの自由度調整済み寄与率は $R^2=.43$ であった。エキスパートによる生徒の文字の総括的評価

表3 エキスパート評価 重回帰分析($n=174$)

	B	SEB	β	VIF
切片	0.34	0.33		
字形	0.42***	0.06	.50	1.54
字粒の大小	-0.06	0.06	-.06	1.27
字粒の揃い	0.08	0.05	.11	1.22
線質	0.06	0.07	.07	1.59
点画	0.04	0.07	.05	1.74
配字	0.14*	0.05	.17	1.27
筆圧の強弱	0.07	0.06	.07	1.08
筆圧の適切さ	0.02	0.04	.03	1.15

***: $p<.001$, *: $p<.05$

には、字形と配字が正の影響を与えることが明らかとなった(表3)。

3.3 ノービスの評価の重回帰分析

ノービスが材料に対して評価した文字の総括的評価を、エキスパートの8つの観点別評価で説明できるかを検討するため、従属変数を文字の総括的評価得点、独立変数をエキスパートの評価した観点別評価得点として強制投入法による重回帰分析を行った。回帰式は有意であり ($F(8,173) = 11.32, p < .001$), モデルの自由度調整済み寄与率は $R^2 = .32$ であった。ノービスによる生徒の文字の第一印象の評価には、字形と配字と筆圧の適切さが正の影響を、字粒の大小が不適切な時に負の影響を与えることが明らかとなった(表4)。

3.4 エキスパート選定の今後伸びる生徒

エキスパートが選定した、今後伸びると思われる生徒の文字と理由コメント(図1), 観点別評価得点(表5)を示す。総括的評価では、エキスパートの評価には字形と配字が正の影響を与えていたが、「今後伸びる」

という判断と、総括的評価, 分析的評価の間に関連性を見出すことはできなかった。

表4 ノービス評価 重回帰分析 ($n=174$)

	B	SEB	β	VIF
切片	1.82	0.31		
字形	0.28***	0.06	.38	1.54
字粒の大小	-0.13*	0.06	-.15	1.27
字粒の揃い	-0.01	0.05	-.02	1.22
線質	0.12	0.06	.15	1.59
点画	0.05	0.07	.06	1.74
配字	0.11*	0.05	.15	1.27
筆圧の強弱	-0.04	0.06	-.04	1.08
筆圧の適切さ	0.09*	0.04	.15	1.15

***: $p < .001, * : p < .05$

図1 今後伸びると選定された生徒の字とエキスパートのコメント

生徒 A	生徒 B	生徒 C	生徒 D	生徒 E	生徒 F
<p>垂直に書くべき線が倒れていたり配字が大きく崩れていたりするが、「垂直な線を垂直に」「マス目の中央に配字よく」などの書写指導を行えば指の運動としては巧緻性が見られるため大きく伸びるのでは。</p>	<p>字粒は小さいものの、一点一画を丁寧に書いており、確実な指導を与えられれば、より自信を持って書くようになるのでは。</p>	<p>点画の空きを等しくすることに注意する等、よく考えて上手に書こうという姿勢が感じられる。読み手が読みやすい字を書こうという意識がみられる。読みやすい活字体と、表情性の高い手書きの筆写体の違いの理解があれば大きく伸びるのでは。</p>	<p>全体に非常に評価が低いですが、それだけに伸びしろが大きい。手本(見本)を参考に視写を重ねれば評価が高くなる可能性大。</p>	<p>配字, 字粒, 線質の評価は低いが、一文字一文字丁寧に書こうという様子が感じられ、指導により評価が大きくなるUPするのは。</p>	<p>乱雑に書きなぐった印象が残るが、点画の空きを大きく支配している様子が窺われ、ゆっくりと丁寧に書く習慣を身に着ければ飛躍的に伸びるのでは。</p>

表5 生徒A~Fの評価得点

	A	B	C	D	E	F
総括的評価	2	5	2	1	1	2
字形	3	5	2	1	1	1
字粒の大小	3	2	3	4	2	3
字粒の揃い	4	5	3	4	4	3
線質	4	4	3	3	1	3
点画	3	2	3	2	1	2
配字	2	4	2	2	2	2
筆圧の強弱	3	4	2	2	2	4
筆圧の適切さ	4	5	3	4	5	1

4. 考察

重回帰分析の結果から、エキスパートとノービスの総括的評価について、エキスパートの観点別の分析的评价をもとに予測すると、エキスパート・ノービス共に字形と配字を重視することが明らかとなった。エキスパートの評価では、字形と配字の観点のみが有意に影響していた。字形と配字は手書き文字の印象を決める観点として、どちらも大きな位置を占めると言える。重点的な指導により、学習者への評価が高まる可能性があるだろう。

一方、ノービスは字形と配字以外の観点も総括的評価に反映させていた。ノービスの総括的評価には、字形・配字に加え、筆圧が適切かつ均一であること、字粒がやや小さめであることが正の影響をもたらしていた。本研究では、ノービスにもエキスパート同様の観点別の分析的评价を依頼したが、ノービスは自分には困難であると回答し、実施することができなかった。ノービスは評価を感覚的に行ったため、分析的な評価が難しかったのではないだろうか。このことは、書写の自己評価をループリック形式で収集し、ノービスによる評価には曖昧な表現やばらつきがあることを報告した杉崎・藤田(2018)の結果と一致する。

以上をもとに考察すると、ノービス(学習者)が感覚的にとらえる文字の美しさは、エキスパート(書写指導者)の分析的な感覚とずれることがあることを示している。8つの観点は書写指導に全て必要な項目であり、もしノービスが別人であったら、他の項目をとらえる可能性もあるだろう。文字の印象という問いからは、感覚的な要素は無視できず、複数のノービスの結果を検討すると、感覚的にノービスがとらえやすい観点の傾

向が掴める可能性がある。

エキスパートが総括的評価で字形と配字に目を向けがちだという結果が、本研究で示されたことは、書写指導に有効である。エキスパートは分析的な評価が可能であるため、自身が総括的評価で字形と配字の観点に目を向けがちであるという意識があれば、他の観点にも目を向けることが可能であるからである。

観点を個性とみなし、それを活かした良い文字を発展させるための視点として、エキスパートに今後伸びる可能性のある生徒の選定を依頼した。今後伸びる生徒の選定では、多様な視点に基づいた良さが表現されていた。その結果は、エキスパートが総括的評価に反映される観点だけではなく、複数の観点から分析的に文字の良さを評価している可能性を示している。学習者が自分の文字の良さを見出すためには、本研究で示されたような観点別に見出される良さを積極的にフィードバックすることが有効かもしれない。

本研究の限界として、エキスパート、ノービス共に対象者が1名であったことがあげられる。書写指導者である第一著者にとっては、本研究のエキスパートの分類は妥当と考えられたが、結果の一般性を高めるため、エキスパート、ノービス共にさらに対象者を増やし、検討することが今後の課題である。

注

注1) 楷書の美しい字形の原則として、点画の間のとり方(間架)と字形の組み立て方(結構)をまとめたもの。古来の著名なものでは隋の智果の「心成頌」から存在し、現今まで様々な書論に残る。

文献

- 松本 仁志 (2009). 「書くこと」の学びを支える国語科書写の展開. 三省堂, p.48.
- 折川 司 (2011). 小学校国語科書写においていわゆる「手本」の価値を理解することの重要性. 書写書道教育研究, 25, p.21-30.
- 新保信長. (2020). 字が汚い!. 文藝春秋, p12-21.
- 杉崎 哲子・藤田 剛志 (2018). 国語科書写における「ループリック評価表導入の検討」. 書写書道教育研究, 33, p.51-60.
- 全国大学書写書道教育学会 (2006) 新編 書写指導 株式会社 社萱原書房 p.9.
- 全国大学書写書道教育学会 (2020) 国語科書写の理論と実践 株式会社 社萱原書房 p.5.